

本を紹介します

親と子と教職員の教育相談室 徳永 恭子

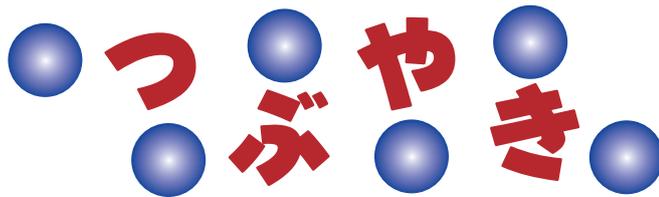
「ブラック化する学校」ー少子化なのに、なぜ先生は忙しくなったのかー

青春出版社 前屋 毅

著者は教育、経済、社会の問題をテーマに取り組んでいるフリージャーナリストである。他にも、「学校が学習塾にのみこまれる」「ほんとうの教育をとりもどす」等の著書がある。世界の教員の中でも格段に長い労働時間の中にいる日本の教員。一日の平均読書時間はたったの13分と言われる教員。そして増える精神疾患による教員の休職。これで教育現場はいいのだろうかとますます危機感を覚える。部活の問題、議員連盟による改革案の問題点、読書したくても出来ない実態、教員が負担に思っている雑務・研修・保護者への対応、授業の準備をする時間が持てない実態が取材のもとに書かれている。勿論当の教員は十分痛感していることだろうが。

公立小中学校で非正規職員が、なぜ増えているかと言う理由にも言及している。今や6人に1人は非正規教員だと言われている。労働条件が守られていない非正規の職員教員の実態も書かれている。最後に「先生や子どもに競争を強いているのは誰か」という問いは、はっとさせられる。真剣に考えなければいけない課題である。学校のブラック化を止めること、そして子どもの可能性を広げること、改善の第一歩は現実を正しく知ることという提言には納得させられた。

教職員をはじめ教育関係者がこの本を手に取り、もう一度「教育とは、学校とは、子どもとは」と振り返る機会を提供する本だと思う。



教職員のゆとりある働き方が、ゆたかな学びをつくりだす

高知教職員組合委員長 岡田 浩幸

教職員の採用数が少なかった高知県でも、定年退職者の増加に伴い、ここ数年の間に採用数が増加してきた。しかし、学校現場に「先生がたりない」と、いった見出しの記事。病休・産育休・介護休等の代替え配置がスムーズに行えず、人材確保に追われている現状。県教委も子どもたちや現場に迷惑をかけないようにと様々な工夫をこらし対応している。年齢制限の引上げ（49歳上限）、県外審査会場を設置、現職教員等を対象とした特別選考を県内外で実施、6月下旬に第1次審査を実施（面接審査を廃止）等必死である。

その要因は、教職員をめざす若者の減少、定年前退職の希望増加とともに、現在社会問題にもなっている教職員の超勤多忙化も大きく影響しており、初任者や若年層のリタイヤもここ最近では課題となっている。同じ職場で勤務していても顔を合わすことや会話をする時間さえもない日もあるようだ。

それに加え、様々な資質・能力が求められ、成

果を出さなければならぬ雰囲気が漂う。若年層とベテラン層との急激な入れ替わりに対応するため、若年層へ求める資質・能力を短期間のうちに習得させたいようだが、逆にリタイヤしていく要因にもなっている。一遍に多くのことをスムーズに習得することは難しい。理解や定着には個人差があり、それは、子どもたちにも大いにあてはまる。

習得していくには、時間と丁寧な指導、職場での同僚性や職場全体で子どもたちを育てていく雰囲気が重要である。何よりも1日の子どもたちの様子や授業実践について振り返る時間が必要である。

仕事の範囲や量を縮減しない限り、根本的な解決にはつながらない。多忙化による職場内の分断を解消し、若者を学校現場で育てていく環境、同僚性の構築が急務である。研修を積み重ねていくことも大切である。だが、何のための研修や授業なのか、私たちはどこを向いて教育をすすめていくのかを忘れてはならない。